

神戸国際大学
キリスト教センター通信
第131号
2025年6月3日

「風に吹かれて」

神戸国際大学キリスト教センター
伊藤 純子



新幹線の降車駅に到着しホームに降り立つ瞬間、外気の心地よさを身体中で味わいます。それまでの数時間、自分の身体が固まっていたことに気付く瞬間です。外の爽やかな風を浴びると、心の奥底まで一気に浄化される感覚に包まれます。

また室内の椅子に長時間座り、ふとしたキッカケで、例えば屋外のトイレに向かうなどの用事で部屋の扉を開けた瞬間も同様です。椅子の上で悶々と煮詰まりすぎた脳内がリフレッシュされ、思考の硬直から解放されて新たなアイデアが浮かんでくることもあります。

「外の風を浴びる」ことは、たいへん心地の良い体験です。しかし、場合によっては心地よいどころか辛くて厳しい「風」もあります。

例えば台風の豪雨を伴う疾風、頬が切れそうな極寒の北風、そして酷暑を更に上書きするような灼熱の強風。そのような不快な風は、ほんの少しの間浴びるだけなら我慢できても、執拗に長時間浴びることは、非常に耐え難いものです。

またいわゆる「無風状態」に感じる空間であっても、風は存在しています。

つまり、快/不快、強/弱、意識できる/できない、にかかわらず、私たちの周りにはどのような時にも必ず風が存在しています。

風は、物ごとを動かします。停滞していたものを変化させます。同じ状態が続いて耐えられなくなってしまっている状態を、変化によって改善させます。

一方で、このままジッとしていたいと思うような幸せで穏やかな環境が、変わってしまうことにより、一時的に嬉しくない環境となる場合もあります。

自分の都合の良いように風をコントロールすることには限界がありますし、そのときの希望通りの変化が与えられない時ももちろんあります。

キリスト教で「風」は「聖霊」、つまり、神様の働きかけの象徴として捉えられています。様々な 風に動かされるとき、その変化を神様の導きと感じることができれば、変化に対する恐怖や拒否感、辛くて苦しい思いから、ほんの少しであっても解放されるのではないのでしょうか。

自分にとって都合の悪い変化に直面した時、未来の自分が「この変化には意味があった」と実感することができるよう、常に祈り続けていたいと思います。そして嬉しい変化が与えられた時には、感謝の気持ちを真っすぐに表現していきたいと思っています。

ひとくちメモ

今年の教会のカレンダーでは6月8日（日）が聖霊降臨日。つまり、神の力（聖霊）が目に見える形となって人々に降り注がれたことを覚える日です。聖書にある「聖霊の象徴」としての「舌」や「炎」は見えないですが、今も変わらず神様は、実際に目に見える形で私たちを動かして下さっています。

